



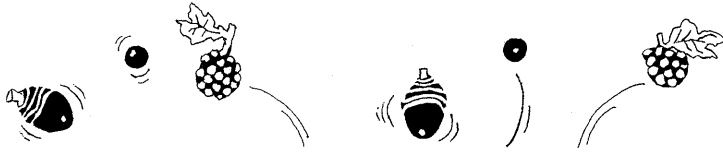
私が幼児教育を志した頃(23)

津守 真

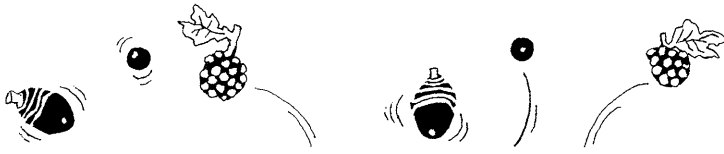
ダリーン家

私がマッケンシュタット氏に連れられてダリーン家に移ったのは、一九五三年の五月一日の暖かい晩だった。

ダリーン家は市の郊外ミネハハクリークの小川の前にあった。ミネハハは、ロンゲフェローの詩「インモータル」で知られているが、アメリカインディアンの伝説の少女ハイワースとの恋の物語の主人公である。小さな銅像が流れのわきに立っていた。ダリーン家の庭の芝生はその小川につながっていた。私共がダリーン家に行った日はロイ・ダリーン氏は出張旅行中で、マッケンシュタット氏はしばらく雑談した後、私一人を残して帰っていった。いつも私は前の家から移るときには新しい生活への緊張感と共

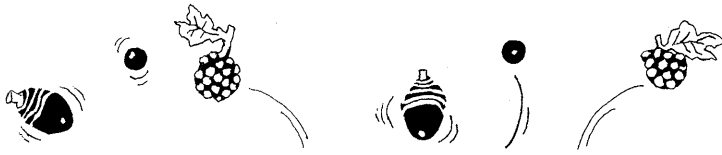


に、親しんだ人々と別れを告げる寂しさを味わった。だがじきに私はバーサ・グリーン夫人の明るく親しげな話振りに引き付けられた。夫人は四十歳をひとつふたつ超えているのに、小柄な身体にエネルギーが満ちて若々しかった。夫人の興味は音楽から政治に至るまで広く、話していて面白かった。三日後の晩にグリーン氏は二週間の出張から帰宅した。帰ると先ず居間の机の上の手紙類に眼を通してから悠然と自分の椅子に戻る。これは毎日家に帰ったときのグリーン氏の日課である。グリーン氏は大柄で、夫人はグリーン氏のやつと肩くらいの背丈の美人だった。グリーン氏はミネアポリス第一の大きなデパート「バワーズ」の家具部の部長をしていた。ゆっくりとした調子で一語一語力強く話した。夫妻はミネソタ大学在学中から親しい友人だった。グリーン夫人の方が一学年上で、音楽科の学生だったが、在学中からソプラノ歌手として有名で、しばしばステージに立っていたとグリーン氏は得意げに話した。夫人は卒業後一年間ニューヨークの音楽学校で学び、ミネアポリスに帰ってからグリーン氏と結婚したときには新聞紙上で騒がれたという。当時の新聞を見せたらうと、大きなトップ見出しに写真入りで詳細な記事が載っていた。夫人の母親ミス・アーウインは、娘は芸術を放棄する気かと思わずいぶん反対したそうであるが、結婚後はグリーン夫人はステージに立つことはなかった。夫妻には十四歳になる双子の男の子、ステイヴとノームと、もうひとり十二歳の男児グレッグがいた。双子と言っても風貌も性格もまるで違っていた。ステイヴはアメリカ人には珍しい内向的な青年で、よく私の部屋に来て悩みを話した。ノームは屈託



なく、人懐っこかった。ステイヴはバイオリン、ノームはチェロ、グレッグもバイオリンを弾いた。皆なかなか上手だった。三人寄ると立派な室内楽団だった。それにグリーン夫人がピアノで伴奏をつけ、ときどきソプラノで歌う。グリーン氏だけでは何も音楽をやらぬ聞き役で、賑やかな明るい一家だった。なかでも気持ち良かったのは、夫妻は他人の立場を理解しようと努めていたことである。人の心を察して同情し、他人の話しを聞いているうちに涙が出て来てしまう。訪問者のあるとき私はしばしばそういう場面に立ち合った。話が日本の戦争の事になり、焼夷弾や原爆で死んだあの人の人の話に及ぶと、夫人は涙を流した。朝、私が学校へ行くときにはきつと前晩の残りの御馳走をサンドイッチにして紙袋を持たせてくれた。近くに住んでいたグリーン夫人の母親のミセス・アーウインは毎日のように娘を訪ねてきて、庭のベンチでよく私とも話した。グリーン夫人にはもうひとり弟がいたが、ミセス・アーウインはその息子のことを「ブラックシープ」と呼んだ。「ブラックシープ（黒い羊）」は日本語では鬼つ子とも言おうのだろうか。長年、家を離れて音信もない。話がその子のことに及ぶとミセス・アーウインは悲しそうな顔をした。

季節が急に夏になって、大学の教室の窓も開け放して芝生は学生で賑わうようになった。一九五三年五月八日に、私は児童研究所の所長室に呼ばれ、MAの試験に合格した旨を知らされた。ハリス教授が私の手を握って「コングラチュレーションズ」と言ってくれた。私はPh.Dに進む気はあるかと尋ねられて、直ちにその気はないと答えた。

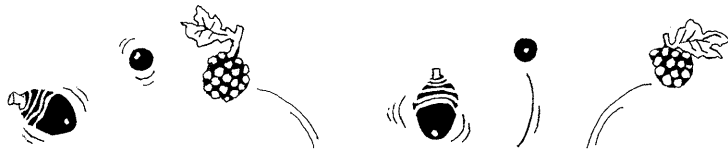


婚約者が持っているのが第一の理由だが、私は早く日本に帰って本式に自分の学問にとりかかりたいと思っていた。学問に国境はないというが、子どもの研究についてはとくに、日本の土壌から生れる学問がなくてどうして本式の学問がありうるだろうか。外国の文献に頼らないで、実物の社会の中に身を沈めてよく観察し、その中から何かを取り出したいと、アメリカに来て以来ずっと考えていた。(そうできるようになるには意外と長い年月がかかってしまったが。)

ノーマン・カズンズ

ダリオン氏夫妻はワールドフェデレーション (World Federation、世界連邦組織) に加わっていた。第二次世界対戦後のアメリカは、世界の恒久平和をどのようにして作れるかに強い関心を抱いている人が多かった。世界連邦はそのひとつで、世界から軍隊をなくして、そのかわりに世界がひとつの警察をもつという考え方だった。日本の再軍備はアメリカでも人々の話題だった。ダリオン氏は日本の敗戦後の農地改革と軍隊の解体を高く評価していた。軍隊という巨大な組織の維持に必要な費用は膨大で、それ以外のことに使ったら世界はどんなに幸せになるか、日本は良い例だと始終言った。私共は夜十二時、一時までもそんなことを話して、もう寝ないと明日が大変だと急いでベツトに入った。

ダリオン氏は、世界連邦の主唱者であったノーマン・カズンズを高く評価していて、

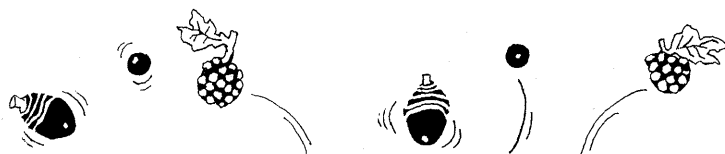


彼の著書、「だれが人間の代弁者になるか？」(Who speaks for man? The Macmillan Company, New York 1953)を私に読むようにと一冊くだされた。ノーマン・カズンズはアメリカで最もよく読まれていたサタデーレヴュー誌の編集長をしていて戦中戦後の世界事情に明るかった。日本を最初に訪れたのは一九四六年(昭和二十一年)だった。その「ヒロシマ」の章は次の書き出しから始まっていた。

「ヒロシマは私が予期していたのとは違った。私は「諦め」を予期していたが、すでに「再建」が始まっていた。私は「荒廃」を予期していたのに、すでに「若い息吹」があった。私は、ヒロシマで原爆の破局を生き残り、生命を取り戻した人達、更に重要なことは、人間と自分自身への信頼を取り戻した人達に出会った。ヒロシマ市民たちは世界で最も美しい市をつくることを計画していた。」

更に彼は次のように書いている。

「もうひとつ私の重要な関心は、ヒロシマ市民自身が原爆とアメリカをどのように考えているかということだった。それを尋ねると、ほとんど信じ難いことだが、原爆を受けた人達が一、二の例外を除いて、憎しみや恨みの感情をもっていなかった。彼らが言うには、もしそれがヒロシマでなかったら他の市に原爆が落とされたろうし、他の人々の犠牲のもとに自分たちが助かる権利はないと言った。自分たちの犠牲によって何百万人も他の生命が助けられたのだと言った。ヒロシマは平和の見本であり、新しい戦争の残酷な性格をドラマチックに示した実験場であり、それは戦争それ自体をも破壊したの



だ。ヒロシマによって戦争は永久になくなったのだと言った。ある婦人は、原爆で死んだ夫のあとを継いで理容師をしていたが、彼女はアメリカ人を見たいとも思わないと言って目をそらした。彼女は自分の心にある憎しみを他人から悟られるのを恐れていた。あんな爆弾を落としたアメリカはそれによって自分たちの名譽を汚したのだ、こんな悪は悪人にしかできないと言った。」

一九五三年五月二十九日、ミネアポリスから車で二時間ほど西北にある小さなカレッジ・グスタフス・アドルフス (Gustavs Adolfs) でノーマン・カズンズの講演会があった。ダリオン氏夫妻は早くからそのことを話していて、私と一緒に聞きに行こうと張り切っていた。グスタフス・アドルフスというのは、十七世紀に有名なスエーデン国王の名である。ミネソタにはスエーデン系の移民が多く、その名にちなんで名付けられた大学である。ノーマン・カズンズの英語は難解だったが、著書と呼んでいたことが助けになった。真つ暗な夜道を車で走りながら、帰途、ダリオン氏夫妻と講演について語り合った。

「アメリカは基本的にデモクラシーの国である。デモクラシーは、ノーマン・カズンズの言葉によれば、雑多性、複雑さ、不一致、非公式性を特色とするが、それを貫いて脈打っているひとつの心臓の鼓動がある。それは個人の決定が優先することということである。政治もイデオロギーも、自由な人間があつてこそそのことである。自由な人間には、高尚な側面もあるし、下劣な側面もある、またその両方がある。デモクラシーはそ

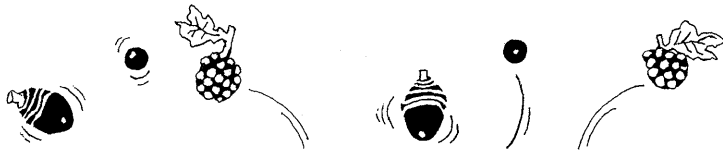


の両方を抱えていることを前提にしなければならない。だから私共は議論をし、良い面で人々が合意してゆくように努力しなければならない。」ダリオン氏は付け加えて言った。「個人的友情はいかなる政治国際状況をも超えて、また人種をも超えて人々の間に温い心を通わせる。いろいろの国の人が互いに訪ね会い、理解しあい、友情を分かち合うことが世界平和の基礎である。私たちは何とかして世界を一つに結ぶような世界組織を持ちたいものだ」これはダリオン氏の持論だった。私も同意した。

数日後の晩に、ダリオン氏夫妻は十人程の音楽家を家庭に招いて小さな音楽会を催した。チェロやフルートの専門家が合奏した。その中心は「とっし」（一柳慧）で、シヨパンその他自分の作曲を十曲以上も弾いて、皆興奮した。「音楽史の一ページが今夜作られた」と音楽家たちが言った。「とっし」の人柄が謙遜なことが皆の尊敬を増した。

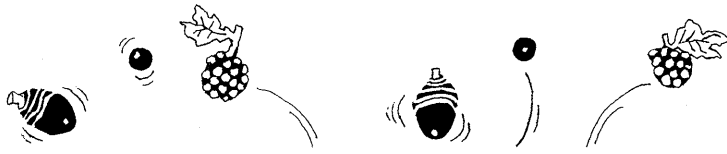
送別レセプション

ある日の午後、大学から帰るとダリオン夫人が、あらたまった語調で、「ミスター・ツモリ、あなたは理髪店に行かないと心を決めているのか」と尋ねた。私は以前に理髪店に行ったとき、椅子に座るや否や「トップ オフ？」と尋ねられて、何のことか英語の意味が分からなくて戸惑ったことがあった。髪の上部を切つてよいかという意味だったのに、頭を切られたら大変と、とっさに考えたのだった。そんなことがある筈はないのに、外国ではこんなことで懲りてしまうのである。私は長い間理髪店にいつてなかつ



た。グリーン夫人がそう尋ねたのには別の思いがあったことに気づいたのはしばらくたってからだった。

五月二十三日、土曜日、グリーン家で私のためにレセプションをするからと知らされた。その計画は早くになされていたらしいのに私は少しも知らなかった。私はまさかこんなに多勢とは思わなかった。半信半疑だった。七時から夕食で、トンプソン夫妻が第一着で、私がミネアポリスに来て以来私を泊めてくださった人達十三軒の人達が、二軒を除いてことごとく夫婦で集まって下さった。私は今さら、こんなにたくさんの方々の家庭に世話になったかと思つたらびっくりしてしまった。そうして一人一人の家のことを思い出して、とても懐かしかった。一軒一軒の家で楽しいときも辛い時も過ごして、皆で笑つたり冗談を言つたりしてきた。文化の相違も国の相違も、社会の相違も超えて、人間同士の愛情のつながりが一番強いものだと思つてきた。私がここで良い経験をただでなくて、一軒一軒の家に私も何かを残したことを知った。それはとても尊いものだと皆が言ってくれた。それから私がどうしてミネアポリスに来るようになってきたかということになったら、皆分からなかった。それで皆トンプソン夫人と北川大輔先生の骨折りと決断を称賛した。それからまた皆で冗談を言つたり笑つたりして十一時頃まで楽しんで別れた。それからグリーン夫妻とたぐさんの皿洗いをした。朝四時、静かなミネハハクリークの傍らの家で、戸外には小鳥が鳴き始めた。私はこれから先どこにしようとも数千マイル隔てた海の彼方に、心を許した友人がいることを信じた。(その

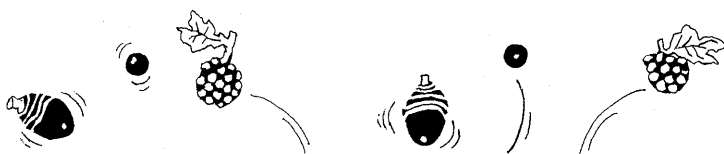


確信はいまなお私の心をはなれない。五十年たったいま、十三軒の中で夫婦で健在なのは、ネルソン夫妻、それからハリス教授夫妻だけである。ひとりだけになって健在なのは、バチエルダ夫人とコルレット夫人であり、他はみな天国の人になってしまった。）

（グリーン氏夫妻は、それから間もなくデパートを辞めてミネアポリスの郊外にホテルを経営した。そのホテルも閉じて一九八三年五月に日本に旅行に來られた。私は一緒に九州まで旅行した。唐津の日本宿で私がグリーン氏を温泉の風呂に誘うと、グリーン氏は廊下の途中まで来て、「自分一人が風呂に入りに行くのは、妻を裏切ることになる」といって部屋に戻られた。一九九六年に私がミネアポリスに行ったときには、グリーン氏はすでに亡く、夫人を病院に訪ねた。車椅子に乗った夫人は痩せて小さく、私にはバーサ・グリーン夫人だと見分けがつかなかった。言葉によるコミュニケーションも失われているとのことだったが、私が声をかけると私を分かったかのようにうなずかれた。間もなく亡くなったとノームから手紙をもらった。）

一九五三年七月一日、私はグレイトノーザン鉄道のミネアポリスの駅を發つた。汽車の駅には私が泊まった家の方々が子どもたちも含めて大勢送つてくださった。ひとりひとりと抱擁して別れた。

七月三日にシアトルに着いた。シアトルでは、はじめて来たときと同様にツァイ牧師が迎えて下さった。そこにはすでにグリーン夫人から私宛の手紙が届いていた。「グレッグと私は昼食にチーズサンドイッチを食べています。そしてもう一度冷蔵庫をのぞ



いてあなたの分のチーズサンドイッチが取りよけてあるのを見て、それから洋服ダンスの中を見たら忘れ物がありました。そして多分もう汽車に乗っているであろうあなたのことを思いました。——私たちは互いに遠くに離れましたが、私たちの心の中にはいつもあなたが生きています。時間も距離もそのことを変えることはありません。男の子たちは、家族のひとりが去ったようだと言っています。本当にそうです。忘れ物はシアトルに送ります。——と記されていた。ツァイ牧師の家庭は、この二年間に二人の子どもさんが生まれて、四人家族になっていて、私が泊まれる部屋はなく、シアトルの埠頭に近い小さなアパートの一室を予約しておいてくださった。七月十四日まで、約十日間、飯野海運貨物船「若島丸」の入港を待ちながら、いつの日かアメリカの家庭のことを記したいと私はそれぞれの家について書き記した。今回、アメリカ留学の記録は、約一年十カ月にわたってミネアポリスから婚約者に宛てて送った日記が主たる資料であるが、このときにこの小さな部屋で書き留めておいた文章も多く含まれている。

「若島丸」は七月十七日にシアトルの埠頭を出航し、カナダのヴァンクーヴァーの近くのテクサダ島で一週間停泊して、鉄鉱石を喫水線が沈むほどに大量に積み、八月初めに九州の八幡港に入港した。ミネアポリスを発ってから約一月の旅だった。